

佳作

体験は自信の積み重ね

秋田県鹿角市立八幡平中学校

1年 館花 莉奈

「あなたには将来の夢がありますか。」

毎年必ず問われる質問にすんなり答えられる人などいるのだろうか。とりあえず頭に浮かんだものを答えているだけなのに、それで世の中は安心している。でも、夢をもつことは簡単ではないはず。大体、何もしていない、本気で頑張っていないのだから、こうなればいいのにと願望は生まれまいだろう。その願望が夢になるのだと思う。

私の将来の夢は、看護師になることだ。それも「手話ができる看護師」を目指している。

母親が看護師をしている影響も大きいのだが、幼い頃から目やお腹、皮膚病などで通院することが多く、病院の中で働く人たちをいつもまじまじと観察してきたことが最も大きかったと思う。病院といっても医師と看護師だけではなく、いろいろな職種があることやそれぞれの役割があって働いていること、何よりも、病気やけがをして不安げにしている人に優しい口調で対応している姿を目にしてきたことで、病院や医療従事者に親しみを感じてきた。自分がほしいと思う配慮が行き届いた身のこなしに、いつしか憧れとともに尊敬の念を抱くようになった。

その後、小学生の時に医療について学ぶイベントに参加する機会を得た。職種について説明する講座に参加した際、聴覚障害者の方にはどう対応するのかという疑問をぶつけてみた。「手話ができる人に依頼している。」ということであった。さらに、医療スタッフには、意外にも手話ができる人間が少ないという現状も知ることができた。

そこで私は、手話ができる医療スタッフがいれば、もっと診察や治療がスムーズにできて、患者も医師も安心して治療に専念できるに違いないと思った。それで、手話を覚えて、手話ができる看護師になると決めたのだ。

一度進むべき方向が定まると、その興味を探求しないではいられなくなり、図書館でも手話に関する本を探すようになった。調べても調べても絵で見る手話は理解できず、イメージすらつかめなかった。本当に手だけで会話や自分を表現することなどできるのかと、「もう、無理。」という言葉を何度つぶやいたことか。思い描いていた「手話ができる看護師」像がしだいに遠ざかっていった。まるで外国語を一から独学で学ぶような感じなのだ。それもそのはずで、

聴覚障害者の方は、34万人もいるとされていて、その方々にとっては、手話はまさしく伝えるための言語、母語なのである。

独学が、こんなにも難しいものなのかと思った私は、誰かに教えてもらえないだろうかと考えた。実際に体験してみたらいいのではないかと思ったのだ。市の広報で社会福祉協議会のイベントを目にした私は、年齢が離れた大人がいくものだと思っていたが、思いきって参加することにした。点字や手話を初めて体験してみて、あんなに複雑でこんがらがっていたものが少しずつほどこけていくようで、できることが増えていく喜びに満たされた。

イベントで手話のサークルがあることを教えてもらい、小学生だった私は、また思いきってその輪の中に飛びこんでいった。毎週、大人に交じって手話を学んでいく日々は、とてもうれしく、充実していた。難しくてもまだまだ普通の会話レベルには程遠く、はがゆくてしょうがないが、手話サークルの方々と交流することも、講師の聴覚障害者の方と実際に手話で会話することも、私の夢に一步ずつ近づいているようで、毎日が生き生きわくわくと、鮮やかに色づいていった。

手話は、私たちが会話している言葉と同じ感覚であることがわかった。手話ができるということは、聴覚に障害のある人と日常をつなげることができるということだ。私がサークルの仲間とつながれたように、手話という「言語」で聴覚障害の方をひとりぼっちにしないための大切なコミュニケーション手段の一つなのだ。「交流」や「つながり」は、自分の存在を実感させてくれるし、自信を持たせてくれるものでもあることに気付いた。

私は視力が弱く、今までたくさんの人たちに助けてもらってきた。家族はもちろん、学校や病院でも配慮してもらい、困ったことはあまりなかった。だから、障害のある人たちにもそうであってほしいし、そのお手伝いがしたいと考えるようになった。その実現が、誰も「ひとりぼっちにさせない」という私の本当の「夢」なのだ。手話ができる看護師はそのための一つの手段である。

障害についてもっと知りたいと思い、ボランティア活動にも参加し始めた。老若男女問わず交流し、いろいろな体験をすることで、また一つずつ自信が積み重なっていく。たくさんの人と体験することが、今日も私を前に進ませてくれている。ありがたいことだ。